

温病学の臨床応用

寇 華勝

中国中医科学院望京医院 客員教授 医学博士、フロンティア大学 元臨床教授

温病学とは温病の病因、病理、発展変化の規則及び診断、弁証、治療を研究する臨床学科であり、中医学の大切な構成部分である。温病学は春秋戦国時代の「内経」を源とし、晋、唐、金、元、明を經ち、清代に成立した。その時、鎖国の時代で、中日医学交流が少なかったのである。

日本は海洋性気候で、台風、季節風、梅雨が多い、高温多湿の特徴を持つため、温熱、湿熱疾患、免疫疾患、アレルギー疾患などが頻発する。温病理論に基づく治療は優れる臨床効果を呈す。地球温暖化とともに、SARS、重症急性呼吸器症候群など感染症が多発してくる、温病学の臨床応用は益々重要な意義を持つことである。

一、温病の主な内容及び分類

1. 病名による分類

春温、暑温、秋燥、冬温、風温、温毒、温疫、温症

2. 発病類型による分類

新感温病、伏气温病

3. 病変の性質による分類

温熱病、湿熱病

二、温熱病証治の大綱

温熱疾患、感染症、膠元病、アレルギー疾患などに繁用する。

1. 衛分の証治

(辛涼清解) 銀翹散、天津感冒片、清上防風湯 (辛涼宣肺) 桑菊飲

2. 気分の証治

(清熱生津) 白虎湯、白虎加人参湯 (泻熱攻下) 大承気湯

3. 営分の証治

(清営透熱) 清営湯

4. 血分の証治

(涼血散血) 犀角地黄湯 (滋陰清熱) 加減復脈湯

治療のポイントは辛涼清宣、透熱転気、達邪外出、涼血護陰などである。

三、湿熱病証治の大綱

高温多湿による湿熱病、湿温病、感染症、免疫疾患、アレルギー疾患などは病状が多彩であり、病程が綿延するので、清熱利湿は繁用する。

1. 上焦の証治

(芳香疏散) 藿香正気散、五加減正気散 (湿熱宣化) 藿朴夏苓湯

2. 中焦の証治

(清化湿熱) 黄芩滑石湯、茵陳五苓 (解毒辟穢) 甘露消毒丹 (化湿清熱) 三仁湯

(清熱燥湿 化痰行気) 加減半夏瀉心湯

3. 下焦の証治

(淡滲利湿) 芳香開竅 茯苓皮飲合蘇合香丸 茯苓飲

エキス剤では、柴苓湯、半夏瀉心湯、平胃散、五苓散、茯苓飲合半、夏厚朴湯、意苡仁湯なども使う。まだ、湿邪が陽気を遏傷することによって、陽気が衰えるのであり、熱邪が陰血を消耗することによって、陰血が虚損するになる。遷延化の慢性疾患に、亀鹿二仙丸を用いる場合もあることである。

四、温病学と後世派. 一貫堂医学

同源異流 竜胆瀉肝湯では、薛生白方もあり、一貫堂医学方もある。

五、温病の鍼灸治療

風池、風府、大椎、曲池、陰陵泉、三陰交etc. 瀉血療法

六、展望

温病の治療原則と方法は日本の風土とよく合うので、理想の効果を収めることができる。しかも、温病の治療原則は鍼灸でも良く適応する。日本の温病学の応用と発展は必ず素晴らしい前景を呈すことである。

七、まとめ